

東京・天龍寺遺跡

てんりゅうじ

所在する。

今回の調査はビル建設に伴うもので、調査区は東西約40m南北15m、調査面積は約610m²である。調査の結果、池（六〇号遺構）・土坑・ごみ穴・植栽痕などの遺構を検出し、文献や絵図には現われない寺院庭園の一部の発見という大きな成果を上げることができた。また、これによって調査地が天龍寺門前町屋に近い庫裏の北東部分であることが明らかになった。

- 所在地 東京都新宿区新宿四丁目
- 調査期間 二〇〇二年（平14）四月～五月
- 発掘機関 (財)新宿区生涯学習財団
- 調査担当者 大八木謙司・野本賢一
- 遺跡の種類 寺院跡
- 遺跡の年代 江戸時代後期～明治時代初頭
- 遺跡及び木簡出土遺構の概要

遺跡は新宿区の西南端、JR新宿駅の東約300mに位置する。延宝年間（一六七三～一六八一）までは千駄ヶ谷村の入会地となっていたが、天和三年（一六八

三）牛込から移転した曹洞宗の寺院、護本山天龍寺の敷地となる。天龍寺は江戸城から見て裏鬼門の位置にあたり、幕府の保護も篤く、徳川家に最も関わりの深い寺院の一つであった。天龍寺は現在も調査地の南側に



（東京西北部）

土坑・箸・桶樽などの木製品、寛永通宝を中心とする陶磁器類、下駄・縁錢状をなす）、瓦など、江戸時代後期の遺物が多量に含まれており、幕末から明治時代初頭にかけての池廃絶時に埋められたごみとみられる。最終的な廃絶は、明治になつてから輸入されるブタの骨が出することから、一八七〇年代から八〇年代にかけてであろう。

なお、遺跡全体の遺構から、肥前系陶器小鉢が多く出土しており、一部の高台には「衆寮」「茶堂」などの墨書きがある。そのほとんど

